

# 名古屋市博物館だより



編集・発行／名古屋市博物館 〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1

TEL (052) 853-2655 FAX (052) 853-3636 http://www.museum.city.nagoya.jp

平成29年(2017)10月1日発行 無料

5,000部発行(年4回1・4・7・10月)

古紙パルプ配合再生紙使用

## 博物館、とっておきのご披露です！～秋の巻～

1年間を通して常設展示室内で展示替えをしながら博物館の逸品を紹介します。国宝や重要文化財、教科書にも載っている資料や尾張の特徴的な文化などを幅広く紹介します。



鈴木バイオリン

近代 館蔵

9/27(水)  
11/26(日)

### 《テーマ 12》名古屋市の成立と近代産業

名古屋市東区に生まれた鈴木政吉（1859～1944）が明治20年（1887）に独力でバイオリンを作ったのは、日本で初めてのことでした。

木材加工技術の蓄積と「芸どころ」といわれた三味線や琴などの伝統があればこそ、これぞ文化です。その後工場生産を始め、今日までバイオリンを生産し続けてきたのです。名古屋を文化不毛の地とは言わせません。

竹内弘明（民俗）

11/29(水)  
12/24(日)

【愛知県指定文化財】

### 四季花鳥図屏風

江戸時代後期 弘化4年(1847) 館蔵

### 《テーマ 10》四季花鳥図屏風

梅逸は写実性に優れた花鳥画の名手として知られます。若い頃は画面からあふれんばかりに密生した理想的花園を描きましたが、この屏風は65歳の円熟期に描かれた作品で、モチーフや色数を整理して中央の空白を生かし、より奥行きのある空間を産み出すことに成功しています。山田伸彦（美術工芸）



### 【重要文化財】製表櫻文銅鐸

弥生時代中期  
福井県坂井市春江町出土  
個人蔵9/27(水)  
10/22(日)

### 《テーマ 2》稻作のはじまった頃

脛部の「田」の字形に区画された空間に、片面にはトンボ、シカ、トリ、カエル、杵で臼をつく人、もう片面では、カメ、建物、カマキリが浮彫で表現されています。農耕に関わるモチーフを描いたのでしょうか。こうした弥生時代の人々の心性に迫りうる絵画銅鐸の中でも、最古級として有名なこの銅鐸は必見です。瀬川貴文（考古）

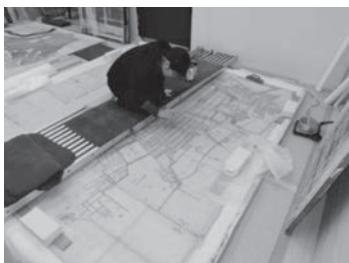


## よみがえれ文化財「名古屋城下図」の修復

博物館資料の修復を目的に平成25年4月から寄付金募集を開始した「よみがえれ文化財」事業は、平成26・27年に続き、昨年度は、天正12年(1584)と19年の秀吉文書2通、どれも芭蕉の画像に句が添えられた掛け軸3幅、そして江戸時代の名古屋城下の地図とあわせて6点の資料の修復を行いました。

いずれの資料についても修復にあたっては解決すべき課題がありましたが、「名古屋城下図」については、異なる年代にわたって絵図上に残された情報をもらすことなく、修復後の絵図に反映するという課題がありました。

地図や設計図など絵図類は、実用的な目的で作成され、使用されたものがほとんどです。長年の使用により蓄積された汚れや傷みに対して、掛け軸や巻子のような本紙を保護する表装はなく、まともに本紙がダメージを引き受ける形態になっています。さらに、絵具のにじみ止めや料紙の保護など絵画作品では当然工程が絵図類では、ほとんど施されていません。岩絵具による料紙の劣化や水気を与えた時の絵具のにじみなど絵画作品以上に考慮した作業の進め方が必要になる点も多々あるのです。



絵具の剥落止め作業。両端から渡した板の上から行っている。

今回修復の対象となった「名古屋城下図」は、修復前の採寸で南北222.5cm東西252.0cmと「名古屋城下図」としても大きな部類に属します。

30×40cm前後の楮紙

を52枚継いで本紙に絵図が描かれ、20×30cmの楮紙を56枚継いだ裏打紙が打たれています。南北に5折、東西に9折と山と谷を交互にくり返して折り、蛇腹に開くことができるよう折られていましたが、継がれた紙が各所で剥がれ、とくに裏打紙は、紙継の剥がれと本紙からの剥がれの両方が進行し、所々でやっとつながっていて、開くたびに1枚1枚がバラバラになっていた状態でした。

また、名古屋城下を描いた江戸時代の地図には、藩士の屋敷替や代替わり、役所の移転にともなって訂正の貼り紙が幾重にも貼られていることが多々あります。この図にも多くの貼り紙がありますがやっと本紙に付いているか剥がれてしまっているものがほとんどでした。

このような状態となった絵図の修復は、解体、本紙修復、仕立て直しの工程をへて実施されますが、最初に行う埃の除去と絵具の剥落止めに続いて、訂正箇所に貼られた貼り紙の除去が必要になり、最終的に貼り紙を現状に戻すのかどうかという判断が求められます。貼り紙については、絵図作成後の様々な時点で貼り付られている上に、多くが当初に貼られた箇所を正確に反映しているとはいえない状態っていました。このため、製作当時の内容が明らかになることが重要と考え、修復後は、貼り紙のない描かれた最初の状態に戻すこととしました。これによって製作当初に記録された年代が明らかになり享保6年(1721)から11年頃、18世紀前半の「名古屋城下図」であることが判明しました。

さらに最大の問題は、外した貼り紙をどのように保存するかという課題でした。もっとも簡便な方法は、取り外した貼り紙をまとめて袋などに入れておく、または、和紙に並べて糊で仮止めしておくなどですが、外れそうな状態とはいえ、現状の場所を留めておく方法はないものかと検討しました。

本紙を分割撮影した写真に修復前の状態に貼り付けることを考えましたが、写真用紙の劣化や接着剤の問題がありました。和紙にプリントしても、プリンターで使用するインクの上に貼り付けることに問題があります。これに対し修理工房からは写真に薄葉の和紙を上端だけ糊付けしてかぶせ、透けて見える元の位置に貼る方法が提案されました。貼り紙といえども本紙にストレスをかけることは回避され、情報が整理されて貼り紙が記録した内容も明和7年(1770)～文化7年(1810)年頃と判明しました。現状としてはベストな方法を探り得たと考えています。

文化財の修復の基本原則は下記の通りです。

1. オリジナルの持つ様々な情報を減らさない。
2. 百年二百年の間隔で修復を繰り返して伝えていける方法を選択する。

文化財保存は百年単位の視点と手間を惜しまぬオリジナル重視の考え方につきるのではないでしょうか。



原寸大の分割写真に薄葉の和紙を貼った上に剥がした貼り紙を貼る作業

「名古屋城下図」はじめ今回修復された6点の資料については、その過程も含め9月27日(水)から常設展話題のコーナーにて紹介いたします。(桐原千文)

## 石匙という石器

いし匙  
せきそく  
石匙という石器がある。石鏃とともに縄文時代を代表する石器といってよいだろう。石器の1か所につまみ状の突起を作り出していることがもっとも大きな特徴である。匙という名前から食べ物をすくうスプーンとして用いられた道具と思ってしまうかもしれないけれど、そうではない。なぜ、このようないい名前がつけられたのだろう。

### 石匙という名称

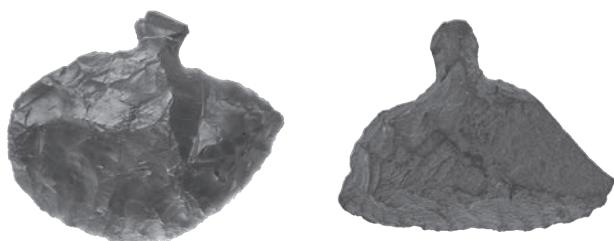
石匙について記されたもっとも古い書物は江戸時代中ごろに刊行された『雲根志』である。そこでは石匙を「天狗の飯匕」といい、「天狗の飯匕」というものは石鏃の類で、かたちは石鏃に似ている。美濃では天狗の飯匕と呼ばれ、出羽や越後、飛騨でも天狗の飯匕と言っている。佐渡、能登では狐の飯匕と呼ぶという」と記している（筆者意訳）。かたちから天狗やキツネ一つまり人ではないものが使うスプーンだと想像されたものらしい。

「石匙」の語が現れたのは、明治20年刊行の専門雑誌のなかである。江戸時代からの伝承に基いて考案されたのだろう。「石匙」と同じ理由から「石匕」、機能の推定から「石小刀」、「皮剥」などの語も使われたが、現在では「石匙」が使われることが多い。

### 大根貝塚の石匙（写真1）

石匙は縄文時代早期後半から見られるようになり、列島全域に分布する。北日本に多く、関東・中部以西ではやや希薄となるようだ。前期中ごろに近畿・北陸・東海にていねいな作りのものが現れる。

ここでは名古屋市緑区に所在する大根貝塚から出土した石匙を見ることにしよう。大根貝塚は名古屋市東部を流れる天白川の左岸にある縄文時代前期の小貝塚で、森達也氏によって発見され、調査が行われている。石匙はチャート製の木葉形の身につまみの付いたものとサヌカイト製の扁平な三角形の身につまみの付いたものとの2点が出土している。

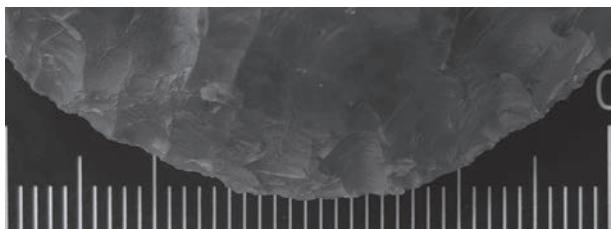


【写真1】大根貝塚出土の石匙  
左がチャート製(幅47.5mm)、右がサヌカイト製(幅47.4mm)

2点ともつまみの軸が刃の方向に対して直交する横型の石匙で、裏面には素材となる石片（剥片）を原石（石核）から打ち剥がした面（主剥離面）が残されている。つまみは表裏両面から押し剥がして作られている。刃は裏面から表面に向かって押し剥がして作られている。2点の石匙は、原料の石の種類が異なり、刃のかたちも異なるが、ほぼ同じ手順で作られていることがわかる。

### 石匙の用途

チャート製の石匙の刃を細かく見てみよう。表裏両面の刃の端に1~3mm程度の不規則な剥離痕がある。これらは使用時にできた欠けである（写真2）。石匙の刃を加工する対象物に接して前後に動かすことによって生じたものと考えられる。風化のために観察しづらいが、サヌカイト製のものにも同様の剥離痕がある。



【写真2】刃の端にある不規則な小剥離痕(表面) 目盛りは1mm

刃の端に付いた微細な剥離痕から大根貝塚の石匙が刃に対して直交する方向に前後に動かす使いかたが想定できる。



ただ、石匙の使いかたは一つだけではなかったようである。【写真3】動かしかたの想定作った石器を使ってできた痕跡と出土資料に残されている痕跡とを高倍率の顕微鏡によって観察、比較した研究がある。それによると、前方に動かす「削る」、後方に動かす「搔き取る」のほか、刃の方向と平行に動かす「切る」、とがった部分を回転させる「孔をあける」などの多くの用途に使われていたようである。作業の対象物もイネ科の植物・木・骨や角・肉や皮など多岐にわたるという。つまみの部分にひも状のものが巻かれたものが知られていて、身につけて持ち運んでいたらしい。

多様な使いかた、持ち運びの便利さなど、縄文人にとっての石匙は、私たちのカッターナイフのイメージに近いものだったと思われる。

(川合 剛)

この大根貝塚出土の石匙を含む森達也氏収集資料は、今年度、名古屋市博物館にご寄贈いただきました。



葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」(株)ティ・エス・ケー蔵

# 北斎だるせん! 前

特別展



2017年

11月18日(土)→12月17日(日)

平成29年(2017)は、なぜか世界中で北斎ブーム。

国内はもとより、イギリスの大英博物館をはじめとしてイタリア、オーストラリアでも「HOKUSAI」と銘打った展覧会が開催されます。また今春のオークションでは、北斎の代名詞といつても良い「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」(通称「The Great Wave」)が、日本版画における落札価格の最高記録を更新しました。それだけ彼の業績と作品が世界中から注目されているタイミングなのでしょう。しかし名古屋にとっても今年は特別な年なのです。

ちょうど今から200年前、ここ名古屋で北斎が大だるまを描くパフォーマンスを行っているのですから。

今秋、名古屋市博物館では特別展「北斎だるせん!」を開催いたします。

展覧会の見どころを5つの驚きポイントとともにご紹介しましょう。

表記の無い作品は全て葛飾北斎『北斎漫画』(部分)名古屋市博物館蔵



## 北斎が名古屋に住んでいた!

江戸の浮世絵師である葛飾北斎(1760~1849)は文化9年(1812)と文化14年(1817)の2度、名古屋を訪れています。

最初の滞在では名古屋の門人牧墨櫻の家に半年ほど居候し、二度目の滞在時には花屋町にあった家に住んだことが分かっています。現在地はそれぞれ、商業施設「ラシック」(名古屋市中区栄三丁目6番地1号)、名古屋コミュニケーションアート専門学校(名古屋市中区栄三丁目20番地4号)付近にあたり、いずれも繁華街の一角となっています。



## 『北斎漫画』は名古屋で誕生した!

「富嶽三十六景」と並んで北斎の代表作とされるのが『北斎漫画』。北斎が世のなかのありとあらゆるものを見た本で、画狂人とも名乗った彼の描くことに対する情熱を感じることのできる作品です。



1890年代から1900年代に、フランスで製作されたガラスの花器です。デザインに、『北斎漫画』初編に載る蛙の図が転用されています。

エミール・ガレ 蛙・蓮文花器 個人蔵  
『北斎漫画』初編(部分) 名古屋市博物館蔵

花屋町に住んでいたとき、北斎が次のように言ったそうです。

「おれはもう江戸へは帰らぬよ、この名古屋はまことによい所で、おれの身体には時候も飲食物もよく合っているから名古屋は死場所。」

サービス精神旺盛な北斎先生のことですから鵜呑みにはできませんが、今も名古屋に住む人間としては、ちょっと誇らしい言葉ですね。



その初編は文化9年の名古屋滞在時に描いた絵を基として、名古屋を代表する出版者永楽屋東四郎によって文化11年(1814)に刊行されました。そして北斎没後、明治11年(1878)の十五編まで、断続的に刊行されるベストセラーとなりました。

『北斎漫画』の影響は国内のみならず海外にまで及び、ジャポニズムに刺激を与えたことでもよく知られています。展覧会では尾張藩十三代藩主徳川慶臧が所有した『北斎漫画』、『北斎漫画』の版本や同書が他作品に与えた影響なども紹介します。

『北斎漫画』十四編版本(部分) (株)芸艶堂蔵

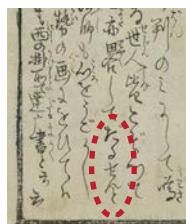


## 北斎が大だるまを描くパフォーマンスを行った！

文化14年の10月5日、北斎  
は西掛所（現本願寺名古屋別院）

にて百二十畳敷の紙に大だるまの半身像を即興で描くイベントを行いました。その大きさなんと縦18メートル、横11メートル。

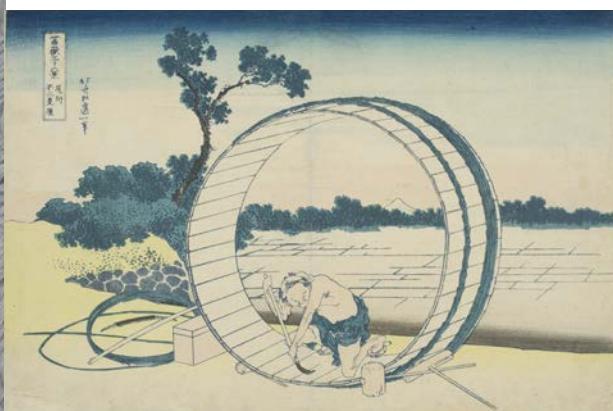
市中の話題をざらい、人々が北斎を「達磨先生」、略して「だるせん」とあだ名をつけて呼ぶほど人気となつたことが、尾張藩士でジャーナリストの高力猿猴庵の記録により分かります。残念ながら北斎が描いた大だるまそのものは現存していませんが、展覧会会場では大だるまや北斎が使用した大筆を再現することで、その大きさを皆さんに体感していただけます。



準備や当日の様子、イベント後に北斎が「だるせん」と愛称されたことが載る記録。



当時制作されたイベント告知用ポスター。  
葛飾北斎「北斎大画即書引札」名古屋市博物館蔵



葛飾北斎「富嶽三十六景 尾州不二見原」個人蔵



## 名古屋から見た富士山を描いた！

北斎が名古屋から江戸に戻って十数年後、あの「富嶽三十六景」シリーズが誕生しました。

その中に名古屋から見た富士山の絵が含まれています。大きな桶（円）のなかから富士山（三角）をのぞき見るという北斎ならではの幾何学的構図が特徴で、シリーズ中でも評価が高い作品です。

展覧会では、高力猿猴庵が描いた同じ場所の絵と比較することで、北斎が創り上げた構図の面白さを実感していただきます。



## イベントを仕掛ける面白い人たちが名古屋にいた！

大だるまイベントでは、牧墨懶ら名古屋の仲間たちがサポートしました。さらには、このイベント自体『北斎漫画』を出版する二代目永楽屋東四郎がブックセールスの一環として仕掛けたものと考えられます。これだけのイベントを仕掛け、そして見事に成功をおさめた、そんな人たちが200年前の名古屋にいたのです。北斎もさることながら彼らの活躍ぶりにも喝采を贈りたいものです。展覧会では、この頃、活況を呈していた名古屋の出版界と永楽屋東四郎、墨懶ら北斎の門人たちの活動も併せて紹介します。



二代目永楽屋東四郎肖像  
(『狂歌画像作者部類』より)  
いずれも名古屋市博物館蔵

本展では「名古屋」という切り口で江戸の浮世絵師「北斎」を掘り下げていきます。

江戸と地方の交流のありかた、そして北斎の絵への情熱を感じていただけると幸いです。（津田卓子）



### 展覧会情報

会期 平成29年（2017）11月18日（土）～12月17日（日）

休館日 11月20日（月）、27日（月）、28日（火）、12月4日（月）、11日（月）

開館時間 9:30～17:00（入場は16:30まで）

観覧料 一般 1,300(1,100)円 高大生 900(700)円 中学生以下無料

※（ ）内は前売および20名以上の団体料金。

※前売券は11月17日（金）まで本展公式サイト、名古屋市博物館、主要プレイガイド、

主なコンビニエンスストア、チケットぴあ（Pコード=768-584）、セブンイレブン、ローソンチケット（Lコード=43610）、イープラスなどで販売。

※名古屋市交通局の一日乗車券・ドニエコきっぷを利用して来館された方は100円割引。

※身体等に障害のある方または難病患者の方は、手帳または受給者証のご提示により、本人と介護者2名まで当日料金の半額。

※各種割引は重複してご利用していただくことはできません。ご了承ください。

主催：名古屋市博物館・中京テレビ放送 / 協賛：愛知トヨタ自動車株式会社 / 協力：浄土真宗本願寺派 本願寺名古屋別院（西別院）

関連イベント続々計画中！最新情報は公式サイトにて。展覧会公式サイト <http://www.ctv.co.jp/event/daruse/>

# ええじゃないか150年

## 「ええじゃないか」150年

いまから150年前の慶應3年(1867)7月14日、三河国渥美郡牟呂村(現豊橋市)に伊勢外宮のお札が降り二夜三日の祭礼が行われました。

お札降りは全国へと広がり、東は上総・安房、西は筑前までおよびます。お札降りが伝播し祭礼が連続すると、日常生活が麻痺する騒ぎとなり、この熱狂的な状況を「ええじゃないか」といいます。発生から150年を機に、常設展で名古屋の「ええじゃないか」を紹介します。【9月27日(水)~10月22日(日)】

### そもそも「ええじゃないか」とは?

「ええじゃないか」の研究史をひもとくと、伊勢神宮のお札降りをきっかけに、およそ60年周期で伊勢参宮が流行したおかげまいりとの関連性が指摘されています。

また、「ええじゃないか」は、幕末の社会不安を背景に流行し、領主の統治が困難なほど、日常生活が麻痺したので、幕末の支配者層を倒す世直し一揆に代わるものとも考えられました。

さらに、近年では、慶應3年5、6月の大坂において、長州征伐の高札撤去を祝う踊り流行に「ええじゃないか」の歌がみられることから、これをお札が降らない「ええじゃないか」とする評価も出てきました。

しかし、全国的に「ええじゃないか」をみると、お札降りから祭礼という流れがあり、お札降りは「ええじゃないか」に重要な役割をはたしています。近年では、「ええじゃないか」の祭礼が、突発的にではなく、各地の伝統的な祭礼の枠組みで行われ、それが「ええじゃないか」の地域性となることもわかってきました。※1

### 名古屋の「ええじゃないか」

名古屋の「ええじゃないか」は、8月28日のお札降りから始まり11月まで流行します。お札が降ると、尾張藩に届けて七日七夜の祭礼を行います。祭礼の途中でもお札は降るので、町中がお祭り騒ぎです。お札を降らせた人物の多くは不明で、夜中に軒先へお札を置いたのでしょうか。町奉行所に届けられたお札は3,400枚におよび、城下全体が祝祭空間となつたのです。

城下茶屋町の場合をみると、町内の者たちで祭礼を行いました。祭りが終わると、降ったお札は町で管理

する屋根神へ納められ、お札に関連する寺社へ参詣して、一連の「ええじゃないか」行事は終了します。茶屋町には9月から10月末にかけて15回ものお札が降りますが、無秩序に祭り騒いだのではないようです。

### 「ええじゃないか」の祭礼

では、「ええじゃないか」の祭礼を考えてみましょう。熱田伝馬町の遊女たちが、片肌脱いだ江戸火消し姿で馬の塔を出しました。髪も男同様に剃ったので、なんとも大胆な演出です。

馬の塔は飾り付けた馬を寺社に奉納する祭礼習俗にわかうまで、流行年には各地で多くの馬が出ました。俄馬は本式の飾りを用いず自由な演出ができるもので世相を取り込むことに長けています。「ええじゃないか」の祭礼に登場するのはこの俄馬です。

従来の祭礼では参加できなかった女性が片肌脱いだ裸参りの姿で馬を出すことは日常をかえりみない大胆な行為に思えますが、実は髪が戻るまで、客による金銭保証が背景にあり、日常を意識しつつおもしろく計画された演出でした。

そして女性の参加は「ええじゃないか」に限りません。おかげまいりでも女性や子供の参宮、日常生活からの抜け参りなど、「ええじゃないか」と共通する事例が多く、降ったお札を町単位で祀る点も同様です。「ええじゃないか」はおかげまいりの影響を受けたに違いありません。

また、伊勢から伝わる鍬神を村から村へと継ぎ送るという、60年周期で流行したお鍬祭りの行列にも、仮装、踊り、造り物が数多くみられ、「ええじゃないか」と共通しています。

馬の塔、おかげまいり、お鍬祭りから大きな影響を受けた名古屋の「ええじゃないか」は、江戸時代に流行したお祭りの集大成かのように城下を熱狂の渦へと巻き込んでいったのです。

(武藤 真)



遊女の馬の塔（『青窓紀聞』名古屋市蓬左文庫蔵）

※1 研究史は「ええじゃないか」の伝播（岩田書院・2010）に詳しい。

## 名古屋で東アジア文化財をみるということ

東洋考古学が専門の私は、かれこれ二十年間近く中国を中心に、アジア各地をウロウロと調査・見学しています。ことに頻繁に出かける中国では、都市部だけでなく、郊外や農村地域に所在する遺跡や文化遺産においても、年々、様子が目覚ましく変わっていくのがわかります。時代が移りゆくなかで、文化遺産の原風景を知りうる資料は、考古学的な出土文物であり、民俗資料や工芸品であり、古写真であり、また近現代以前の研究家たちが遺した記録や著作です。それらを踏まえて実際に現地に立ち、実地の見学と観察を通して、元々の景観はどのようにあったか、この文化遺産の立地はなぜこの場所なのか、過去の時代ここにどんな人々がどのように関わり活動したのか…、さまざまに考えをめぐらせます。現地に立ち、あるいは実物に触ることで、それぞれの文化遺産の背景にある歴史と文化、原風景などのイメージを肌で感じることができます。

### 館蔵 東アジア文化財の特徴

名古屋市博物館は主に名古屋と尾張の歴史をテーマとする博物館ですから、海外である東アジアの文化財を積極的に収集しているわけではありません。とはいえ、そんな当館でも考古資料などにいくらか、東アジアに関わる文物を所蔵しています。参考資料として購入したものもあれば、個人の方から寄贈をいただいたものもあります。しかしながら博物館のテーマ性から、それらの東アジア文化財は海外の資料という扱いとなり、なかなか展示等に活用される機会が得にくいものです。

数年前から、私は東洋考古学者としての責任感から、当館が所蔵する東アジア文化財を必ずしも考古資料に限らず、積極的に調査し展示公開するよう取り組んでいます。当館所蔵の東アジア文化財にはその資料自体の重要性だけでなく、名古屋との関わりという価値があり、これらを広く知っていただかないのはもったいないと考えています。私のその思いとご縁があつてか、偶然ではありますが、ここ数年の間に中国の文物・文化遺産に関するまとまった重要な資料群をご寄贈いただく機会に恵まれました。

明治から現在にいたるまで、東アジアの文化遺産、つまり史跡や習俗あるいは文物などに関して、調査・研究や古物収集をしてきた研究者や考古学・歴史の愛好家は少なくありません。当館が所蔵する東アジア

文化財の多くは、名古屋に所縁のあるこのような人々の所有資料をご遺族や関係者からご寄贈いただいたものです。そのなかには、名著『長安史蹟の研究』で高名な中国史研究者・足立喜六氏や、法隆寺の昭和の大修理を担った建築史学者・浅野清氏など、文化遺産の世界できわめて著名な研究者に関わるものもあります。他方で、職業的な研究者ではない市井の愛好家の手による収集資料にも、松本勝弘氏収集古鏡のように地道な学習にもとづいた目でコレクションされそれだけで歴史を物語りうる重要な資料群や、近代の民間人の歴史愛好精神をよく表すような収集品など、貴重なものがあります。

### 館蔵東アジア文化財に何を見出すか

学者として研究する人、元々は本職でないが現地の文化や歴史に魅せられ研究した人、個人の歴史・古物好きが昂じて収集した人など、取り組みの姿勢は人によってそれぞれ異なります。しかしながら、東アジアの文化財を通して、そこに当時の人々が躍動する歴史上のワンシーンを見つめたという点では、みな同じような思いであったにちがいありません。

つまり、これらの館蔵東アジア文化財が名古屋にとっても重要であるのは、近現代の名古屋に所縁の人々が東アジア各地の歴史や文化に対して抱いた深い关心、自分たちの外側にある広い世界に向けていた視野を示していることです。これは、名古屋・尾張の未来に向けて、進取の精神や外の世界に飛び込むことの重要性を改めて提起してくれるものです。同時に歴史資料としても、現在では失われたり様相を変えてしまった史跡や、未解明の遺跡に関する貴重な情報を知りうる点で重要です。

当館所蔵の東アジア文化財は、博物館資料が過去の歴史も、現在の研究の面白さも、未来への視線も教えてくれる、ということの好例といえるのではないでしょうか。

(藤井康隆)



館蔵東アジア資料の一部

9/27(水)  
10/22(日)

## 【愛知県指定文化財】伊勢参宮図屏風

江戸時代前期  
館蔵

## 《テーマ 10》伊勢参宮図屏風

およそ350年前の伊勢参りを描いた屏風です。宮川の渡しから山田の門前町を抜けて外宮の参拝までの様子を取り上げています。参拝者や彼らを案内する御師、町の人々が生き生きと表現されているのが魅力で、その楽しげな様子に思わず一人ひとりにセリフを付けたくなってしまうほどです。\*今年、名古屋市指定文化財に指定されました。

津田卓子(美術工芸)

10/25(水)  
12/24(日)

## 中国古鏡コレクション

春秋戦国～中華民国  
館蔵(松本コレクション)《フリールーム》  
東アジア歴史遺産へのまなざし

中国の銅鏡の出現から近代まで、通史的に変遷を追うことができる屈指の一大コレクション。写真の「三段式神仙鏡」は、漢代に数ある銅鏡工房のうち吳郡(現在の蘇州)の工人が創出したことを述べる銘文があり、製作工人の出身地と作風の対応がわかる貴重な銅鏡のひとつです。文様のデザインが精密に表現された美しい鏡で、神々の姿を立体的に肉彫りしています。

藤井康隆(考古)

博物館、とっておきのご披露です!  
～秋の巻～9/27(水)  
10/22(日)

## 「青窓紀聞」

江戸時代後期～明治 名古屋市蓬左文庫蔵

## 《フリールーム》ええじゃないか 150 年

慶応3年(1867)8月末から11月にかけて名古屋城下を熱狂の渦に巻き込んだ「ええじゃないか」を描きます。酒宴での踊りでしょうか。鼎をかぶった人物は、「徒然草」に登場する酔って鼎をかぶって抜けなくなつた人物の模倣に違いありません。図中の人物は、すつきり抜けたのでしょうか?

武藤真(文書典籍)

9/27(水)  
10/22(日)

## 与謝蕪村書状

久村暁台・井上士朗宛  
安永7年(1778)10月11日付 館蔵

## 《話題のコーナー》真筆で味わう季節の句

人は何故、句を作るのでしょうか?

—それは季節が変わるから…

江戸時代に広がった句を作る趣味。五・七・五の短いフレーズの中に季語を織り込むのが決まりでした。季節感豊かな名句の数々を、作者の真筆で月ごとに1、2点ずつ紹介します(来年6/24まで)。芭蕉・也有などが次々に登場しますが、これは蕪村が名古屋の友人に宛てた句入り手紙。さすが蕪村、絵も文字もユーモラス!

山本祐子(文書典籍)



通年展示中

## 尾張元興寺跡出土軒丸瓦

奈良時代 名古屋市教育委員会蔵

## 《テーマ 4》古代の尾張

現在の金山総合駅の南に、かつて尾張地域で最初に造られたお寺(尾張元興寺)がありました。出土瓦で特徴的なものは、蓮華の花びらにパルメットと呼ばれる唐草風の文様をもつこの軒丸瓦です。文様も華やかですが、実は河内国野中寺(大阪府羽曳野市)の瓦と同じ型で作られたことが分かっています。1,300年以上前の、尾張と畿内のつながりを示す貴重な「証人」です。

岡村弘子(考古)



(部分)



東海学園大学

名古屋市博物館開館 40 周年オフィシャルサポーター